

アニマルスピリット： 人間の心理がマクロ経済を動かす

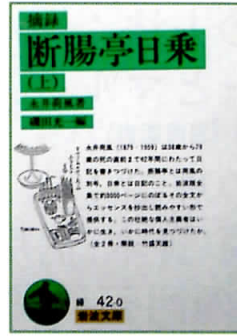
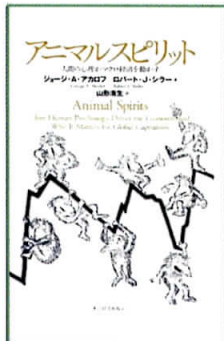
ジョージ・A・アカロフ、ロバート・J・シラー著
山形浩生訳 東洋経済新報社 2009

経済学部准教授 大倉 正典

われわれは、日々、労働や消費など経済活動を行っている。経済のさまざまな事象を説明するとき、伝統的な経済学は人々が経済利益を合理的に追求していると想定しているが、この伝統と一線を画して、アカロフとシラーは非経済的な動機や非合理的な行動が経済で演じている役割に注目する。もともと心的エネルギーや生命力をさすアニマルスピリットは、合理的な計算では説明できない「不穏で首尾一貫しない要素」を経済に持ち込む。アニマルスピリットは経済合理性にとって厄介な存在であるが、著者たちは、安心、公平さ、腐敗と背信、貨幣錯覚、物語をアニマルスピリットの五つの側面として、現実の経済現象を説明する。

本書は、最近の金融危機などマクロ経済的事象に多くの紙面を割いているが、私が印象的に感じたのは、労働経済学者が賃金を管理する職務について公平さという視点が圧倒的に重要であったというエピソード、そして、黒人の貧困において白人の「あいつら」と黒人の「おれたち」という物語が果たしている役割についての議論である。

紹介した本から外れるが、「脳」研究を特集しているニュートンの本年3月号には、CMが人間の「原始的な欲求」に直接作用していて、理性でその影響を排除することは難しい、との研究成果が紹介されている。これも人々の選択が理性だけでは上手く説明できないことを示唆している。伝統的な経済学は、経済事象を説明する上でたいへん有効であるが、同時に、非経済的な動機、自然科学上の知識にも視野を広げることによって、われわれが日々行っている経済活動への理解を深めることができるであろう。



摘録断腸亭日乗 上・下

永井荷風著 磯田光一編 岩波書店 1987 (岩波文庫)

法学部教授 高橋 勇夫

学生に限った話ではないが、「世間」に対してどういうスタンスで向き合うか(あるいは向き合わないか)という問題は、けっこう悩ましい。「就活」で駆けずり回るようになると世間に触れたような気がするそうだが、それでは遅すぎるかもしれない。自分を認めてもらおうとするだけでは、たとえ就活に成功しても、いずれ「世間」に呑み込まれてしまうだろう。

戦争、政治家、文壇、新聞記者、ラヂオ、威張るやつ、……、荷風はほとんどあらゆるものに腹を立て続けたが、よくもあれだけ怒る相手がいたものだと、うらやましくも思う。しかも怒るのが抜群にうまい。批判には道理とロジックが必要だが、怒るのだって知識と技術が要るのである。頭に来たからといって闇雲に叫べばいいというものではない。

専大の学生たちは、概して、善良であることによって世間に認めてもらおうと考えているフシがある。批判すべきことは批判することをおぼえた方がいい。それもじつは、多分に技術なのである。ぜひとも『断腸亭日乗』を愛読して、怒るためのトレーニングを積んでほしい。